

命綱としての世界政治研究会

市川ひろみ（京都女子大学）

世界政治研究会には、その第1回の研究会に出席したかどうかの記憶はないのですが、当時、神戸大学の院生だった私は、発足当初からお世話になっていました。

大学院の指導教員からは関西の狭い世界に留まるのではなく、「他流試合」として関東の研究者とも議論することを勧められていました。「関東」とは「研究者が集まっている」という意味で、関東では大勢の研究者が切磋琢磨しているのに、関西では研究者が少なく「のんびりしている」という批判が含まれていました。当時は、論文や研究書、とりわけ洋書の入手は、大手の本屋か図書館に行く必要がありましたし、参加可能な研究会も関東と関西では大きく異なっていました。つまり、「どこに住んでいるか」が研究環境を大きく左右していました。

私は修士論文のテーマが東ドイツの民主化運動であったことから、関西在住のドイツ研究をしている院生・教員の方々との研究会を行っていました。そこからのご縁で世界政治研究会に参加するようになりました。東京から大阪市立大学に赴任されたばかりだった石田さんは、私にとっては「関東の研究者」でもあり、少し緊張して研究会に参加した記憶があります。今から思うと、それほど私にとって「関東」は遠い存在だったこと、また、関東以外の地域には関心が向いていなかったことに恥ずかしい思いがします。

そんな私の最初の就職先は、全く関心もなく行ったこともなかった愛媛県今治市にある福祉や幼児教育を専門とする小さな短大でした。社会科学にも、研究そのものにも縁遠いところでした（一時は研究費が実質年間1万円！というくらい、ちょっと想像を超えていました）。近隣には同じ専門分野の研究者がほとんどいないだけでなく、専門書を置いている図書館や書店もなかったため、「のんびりしている」どころではなく、「置いてけぼり」になっていると心細くなり、果たして研究を続けることができるのだろうかと不安でした（四国はいいところで大好きだったことも急いで付け加えておきます）。とにかく「研究を止めてしまうことだけはしない」と細々と勉強をしていたときに、遠く感じられた「研究」とつながってくれていたのが世界政治研究会で、私にとっては「命綱」のように感じられた存在でした。

世界政治研究会に出席したり、報告したりさせてもらってコメントをいただけたことだけでなく、そこで出会った方々とお話することで、励まされたり、慰められたりしたことがとても貴重でした。それは、世界政治研究会がまだ大きな集まりではなく、比較的少人数だったからこそ、ゆるやかな仲間のような感覚をもてたことも幸いしたと思っています。かつて指導教員が勧めた「切磋琢磨」する場とは少し違うと思いますが、私にはとても大切な存在でした。そのような場に誘ってくださったみなさんに感謝いたします。